

こころ

映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1914) 「朝日新聞」
監督：市川崑 (1955) 脚本：猪俣勝人 長谷部慶次
出演：先生 森雅之 撮影：伊藤武夫
奥さん 新珠三千代 音楽：芥川也寸志
K (梶) 三橋達也
私 (日置) 安井昌二 未亡人 田村秋子

私はその人を常に先生と呼んでいた

『こころ』は夏目漱石の小説のなかでもロングセラーとして後世の読者にもよく読まれている。百年後の読者を対象とした文学作品の人気投票では、史上第一位になるのではなからうか。

しかし、『こころ』の先生のこころはわかりにくい。読者は先生のこころに自分のこころの反映をみとめるかもしれないが、そもそも人間のこころは複雑怪奇である。自分のこころでもそう簡単にわかるはずがない。

「私はその人を常に先生と呼んでいた」という書き出しだが、その人は仕事もせず、毎日ぶらぶらしている。一緒に散歩すると、いきなり道の端へ寄って行って、綺麗に刈り込んだ生け垣の下で裾をまくって小便をしたりする。

どうみても先生らしくない人物である。自殺する前に語り手の私一人あてに遺書を残した。最愛の妻あての遺書ではなく、妻にだけは何も知らせたくないと思っている。読者は自分だけに秘密をあかさされたという気分になる。

遺書では叔父に財産をだましとられたことだけでなく、親友をだしぬいて恋の勝者となった自らのエゴイズム(悪)を告白している。人間はいざという間際には誰でも悪人になる。他人も信じられないし、自分も信じられないという。

そんなことは深く考えないほうがいいですよとフーテンの寅さんなら忠告してくれるだろうが、



こころ

映画文学人生論

生真面目な先生は思いつめたあげく、明治の精神に殉じるといって自殺してしまった。

自殺のきっかけは明治天皇の崩御にともなう乃木希典大将の殉死ということになっている。乃木大将の殉死は理解できないこともないが、先生の殉死はわけがわからない。

明治の精神とは何だろう。王政復古か富国強兵か、それとも文明開化か。尊皇攘夷や自由民権ではなさそうだ。

それはともかく、先生の自殺は無意味な犬死ではなかったかもしれない。『こころ』は朝日新聞に連載された後、岩波書店から自費出版されて以来、通算二千万部以上売れ、百年後の現在もなお若い世代を中心に読まれ続けている。

少なくとも二千万人が先生のこころの秘密を知り、自分自身も善人、悪人と単純にきめつけられないボーダーレスの人間ということを悟った。今や先生の死の影響力は乃木大将の殉死よりもはるかに大きいと思う。

市川崑監督の映画は、原作を理解する上ではあまり参考にはならないが、先生が親友Kの墓参りをする雑司ヶ谷墓地の雰囲気映像でしのぶことはできる。Kの墓は実在しないが、漱石の墓はその墓地にあり、今も墓参りする人がたえないとわれている。

去年今年貫くこころの如きもの